旧古井家住宅(皆河の千年家)の概要

中世に荘園の名主を務めたと伝わる古井家が15世紀に建てた、現存する我が国最古級の民家建築です。「無災の千年家」とも呼ばれ、中世の姿を今に伝えています。

国宝としての価値

旧古井家住宅は、間取りや建築手法に古い時代の特徴がよく残されており、室町時代の柱や梁が現存しています。
中世民家の現存数は極めて少なく、当時の上層民の暮らしを知るうえでも貴重な民家建築です。悠久の時を経てなお同じ場所にたたずみ、中世の景観を今に伝えています。
こうした極めて深い文化史的意義が評価されました。

国宝指定日：令和8年9月4日

旧古井家住宅にまつわる伝承

この家を建てる際、裏山から転がり込んできた「万年無災の亀石」にまつわる言い伝えや、天正9年(1581)に、羽柴(豊臣)秀吉が姫路城天守の建築にこの家の木材を用いたとの伝承があります。また、江戸時代に2度起きた近隣火災からも免れたとの記録も残ります。
こうした物語は、この家が古くから「無災の千年家」として親しまれてきたことを示しています。

調査と再評価

共に国宝となった旧古井家・箱木家の両千年家は、大変希少な中世の民家建築です。日本建築史研究をさらに深めるため、姫路市と神戸市とが共同で、より広い視点での再調査を行いました。
文献調査、日本建築史上の再検証や科学調査(放射性炭素年代測定)などを行うことで、両住宅の価値を再評価する契機となり、国宝指定へとつながりました。



所在地 兵庫県姫路市安富町皆河233－1

開館日 土・日・祝祭日(年末年始は除く)
午前10時～午後4時まで

入館料 無料

駐車場 有(私設有料駐車場・皆河公民館駐車場など)

アクセス

◎自家用車の場合
・中国自動車道の山崎I.Cより約12km
・国道2号線から29号線を鳥取方面へ約28km
◎交通機関の場合
・JR姫路駅より神姫バス 鹿ヶ壺行き行友下車
※詳細は神姫バスへご確認ください

無災の千年家

国宝 旧古井家住宅

姫路市北西部の山間に建つ
現存最古級の民家建築
15世紀以来、守り継がれてきた
有力農民の住まい



外観から見る室町時代の姿

・入母屋造、茅葺屋根で、当時としては大きな民家
・人の背丈ほどの低い軒で、重厚感あるたたずまい
・土塗りの大壁造で、窓が小さく、閉鎖的なつくり
・棟に×字形の木組み「ミヤクシ」を7連並べる

音声案内はこちら

姫路市教育委員会

中世の暮らしを伝える間取り

内部は、東側の広い土間（ニワ）と、西側の居室部からなります。住む場所と働く場所が一つの建物にまとめられた、古い民家の構成がよくわかります。居室部は、南側を一室の座敷（オモテ）とする「前座敷型三間取」の形式で、江戸時代に広まった四間取（田の字型）民家につながる古い形式として、重要な意味を持っています。

昔の大工仕事の跡

柱や梁の表面に見られる凹凸は、手斧（ちょうな）と呼ばれる大工道具で木材を加工した跡です。機械で加工したものとは異なり、職人が木材を少しずつ削ったことがわかります。建物そのものが昔の技術を伝える資料です。また、柱や梁をよく見ることで、修理されながら現在まで守られてきたことも感じられます。

チャノマ・ナンド

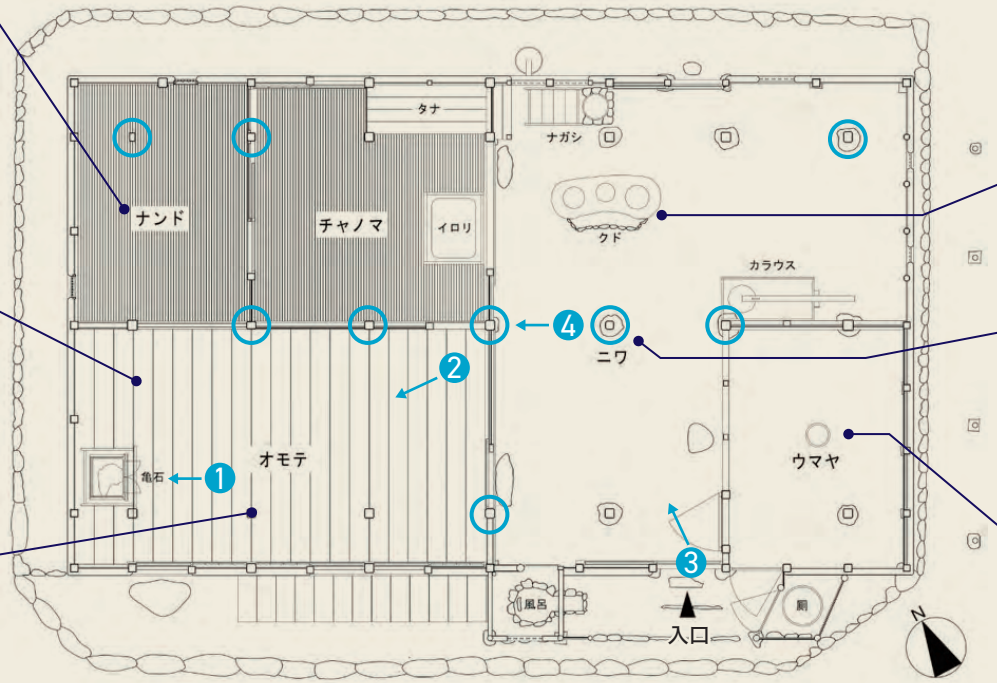
イロリを備えたチャノマは、家族が集まるくつろぎの場です。ナンドは、寝室として使われたと考えられます。オモテと違い、竹すのこ敷の簡素な床です。
部屋によって床や壁の材料が異なり、用途に合わせたつくりになっています。

オモテ・万年無災の亀石

表側に設けられた広い座敷で、家の中心的な空間です。床は、加工に手間のかかる板材を用いています。
オモテの祠の中には、万年無災の亀石が納められ、大切にまつられています。

組み方の特徴

柱を省略せず、一間ごとに整然と柱を建てるため、室内に独立柱が現れる点が特徴です。南側の壁とこの柱の間の空間は、江戸時代の民家では縁側に変化していきます。



平面規模：桁行13.9m、梁間8.1m

室町時代の柱

クド・ナガシ

かまどや流しを設け、煮炊きなどの炊事を行いました。

ニワ

建物の東側がニワで、とても広い空間となっています。人が出入りする場所だけでなく、農作業や道具の手入れ、炊事などを行う作業場として使われていました。

ウマヤ

ニワの南東隅には、仕切りで区切られたウマヤがあります。ここでは農作業や荷物を運ぶ仕事を手伝う、馬や牛などを飼っていました。

① 亀石



② オモテ内部



③ ニワ内部



④ 柱の加工跡

